滋賀大学教育学部紀要　教育科学
No.68, pp. 87－98, 2018

中学校国語科教材としての「バースデイ・ガール」論

―新学習指導要領における小説教材の可能性―

黒　田　大　河

"Birthday Girl", As a Junior High School Language Arts Teaching Materials

Possibility of Novel Teaching Materials in the New Education Course Guideline

Taiga KURODA

キーワード：村上春樹、学習指導要領、読むこと、話すこと、聞くこと

1　はじめに
2　中学校学習指導要領国語科の改訂について
3　中学校学習指導要領国語科における小説教材の位置づけ
4　小説教材としての「バースデイ・ガール」
5「読むこと」から「話し合う」活動へ
6　おわりに

1　はじめに

2016（平成 28）年 12 月の中央教育審議会答申を受けて中学校学習指導要領が改定され、2017（平成 29）年 3 月 31 日に告示された。平成 30 年度からの移行措置期間、教科書検定を経て、2021 年 4 月から完全実施されることになる。本論は学習指導要領の改定を受けて、中学校国語科における教材の扱いにどのような変化が生じることとなるのか、その中でも小説教材の意義を検討することを目的とし、あわせて教材研究の実際とともに考察を深める。

考察の対象として『伝え合う言葉　中学国語 3』（教育出版）に掲載された村上春樹「バースデイ・ガール」を取り上げる。原善の調査によれば、村上春樹の小説作品は「鏡」、「レキシントンの幽霊」、「カンガルー日和」、「沈黙」など多くが高等学校向け教科書に載録され、特に 2000 年代以降にその数が増えることと、「鏡」などが定番教材化していることが指摘されている。中学校教科書には「バースデイ・ガール」以外に「ふわふわ」（『国語 2』光村図書）、「鉛筆削り」（『中学生の国語　学びを広げる　3 年　資料編』三省堂）が収められているが、前者は画家安西水丸との共作絵本であり、後者は「資料編」への収録という条件を考えれば、中学校向け小説教材として「バースデイ・ガール」は数少ない例だということになる[1)]。

しかしながら、森鷗外「高瀬舟」や魯迅「故郷」といった定番教材の見直しのなかで採用された同時代作家の短篇小説であること、また村上春樹の作家研究の蓄積のなかで教材研究へとつながる先行論を多く持つこと、以上二点の理由から当該作品を扱うこととする。

また、発達段階から言って高校生と比較して批判読みが難しいと考えられる中学生段階で、語りの方法の巧みさや比喩表現を通してフィクションの面白さを充分に味わえる本作品は、教

＊　滋賀大学教育学部非常勤講師

材として高等学校国語につなげる意味を持っていると考えられる。また、人生の意味について考えさせるという主題についても、思春期前期の多感な時期の生徒にふさわしい教材であることも付け加えて置く。

以上、本論においては、中学校学習指導要領国語科の改訂にともなって、小説教材の位置づけがどう変化するのかを検討し、村上春樹の短篇小説「バースデイ・ガール」の教材研究を通して考察を深める。

2 中学校学習指導要領国語科の改訂について

今回の学習指導要領の改訂の基本方針について、文部科学省の『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』[2)]の「総説」には、第一に「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す」ことを挙げ、その際に「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視する」としている。「未来社会を切り拓く」、「社会と共有」、「社会に開かれた」と繰り返し強調されているように、教育の社会的効用についての厳しい問いかけが改訂の根底にあると言えよう。「総説」でも述べられているように、少子高齢化やグローバル化、また情報化社会の進展やAIの進化など、前回の改訂から十年を経た社会的な変化に対応し、前回の改訂でも鍵となった「生きる力」の育成という教育目標を、より具体的に定義しようとしていることが、改訂の基本方針における「社会」との連携という目標の意義であろう。

それでは、本論で扱う中学校国語科における改訂の要諦を押えておくこととする。

前回の改訂（平成20年告示）に示された中学校国語科の目標は次のようなものであった。

> 国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる[3)]。

このように前学習指導要領における中学校国語科の目標とは「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成」することを第一とし、その国語の理解力と表現力とに基づいて「伝え合う力」、「思考力や想像力」、「言語感覚」、「国語を尊重する態度」などが養われるという構造になっている。特に「伝え合う力」と「国語を尊重する態度」の二点は、「生きる力」の中心としてのコミュニケーション能力の育成、および伝統文化への深い理解という指導要領に盛り込まれた学習意図として注目される。

今時の改訂もまた、「伝え合う力」と「国語を尊重」することという二点が強調されることには変りがない。ただし、その中身がより具体的な項目として明文化されることとなっている。新学習指導要領における中学校国語科の目標は次のようなものである。

> 言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
> (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
> (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う[4)]。

前学習指導要領における「国語を適切に表現し正確に理解する能力」の文言はより詳細に「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と定義されている。ここには「言葉による見方・考え方」とあるように、国語による理解と表現の前提として「見方・考え方」を支える言語の重要性が指摘されている。またその「資質・能力」はあくまでも実際の「言語活動」を通して育成されるという定義も付加されているということがわかる。

また、(1)〜(3)の項目はそれぞれ、国語科において養うべき「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向う力、人間性等」に対する具体的な目標である。(1)における「社会生活に必要な国語」という定義、(2)における「社会生活における人との関わりの中で」という限定は、先に基本方針の分析で明らかにしたように、教育の社会的効用を重視し、学習者生徒が「未来社会を切り拓く」ための言語の能力の育成という観点にそったものである。したがってここに言う「社会生活に必要な国語」、および「社会生活における人との関わり」という形容を、実社会におけるコミュニケーション言語を身に付けることで他者と積極的に関わっていくという意味で、社会的有用性という側面からのみ理解することは、「生きる力」の育成という基本方針をきわめて限定的に理解することになるだろう。

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編』にも示されているように、例えば(1)の項目については「社会生活に必要な国語」とは「言葉の特徴や使い方、話や文章に含まれている情報の扱い方、我が国の言語文化に関する「知識及び技能」のこと」とされている。ここでは、日常的な場面のみならず伝統的な言語文化に遡ってはじめて社会生活を営むのに充分な言語的知識が身につくのだ、という言語観が前提となっていると言えるだろう。また(2)の項目に関しても「伝え合う力を高めるとは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである」とされている。(1)の項目が知識事項であるのに対して、(2)の項目が「思考力、判断力、表現力等」に関する目標であることの意味は、言語が単なるコミュニケーションの道具ではなく、「論理的に思考する力や豊かに想像する力」の基礎となるものだという言語観に基づくものである。その意味で、(3)の項目が「学びに向かう力、人間性等」を示すのは、前学習指導要領で示された「国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」という文言が、実際にはどのようにして個別の学習者生徒の成長へと結びつくのか不明確であったことに対して、「言葉がもつ価値」への認識と「言語感覚」の涵養とが、「我が国の言語文化」への尊重に結びつくのだという認識に基づくことがわかるのである。

以上のように中学校学習指導要領における国語科の改訂によって、「生きる力」の内実としての「伝え合う力」とは、「社会生活に必要な国語」への理解と、「社会生活における人との関わり」によって育まれるものであり、そのような言語活動の実際を通して「国語を尊重してその能力の向上を図る態度」が育まれるとする言語観・教育観に基づくことが確認された。

3　中学校学習指導要領国語科における小説教材の位置づけ

それではこのような教育目標を掲げるなかで、小説教材の位置づけとはどのようなものであろうか。前回の改訂に示されたように、「読むこと」だけではなく「話すこと」、「聞くこと」、「書くこと」という言語活動を重視する学習指導要領の方向付けは、教科書教材に影響を与えた。教師による講義と座学による一斉授業の形式で進められる授業形態は、「読むこと」を偏重した教材の扱いをもたらすとされ、生徒同士の話し合い、グループ発表や個別の発表といった「話すこと」、「聞くこと」に関わる活動の重視、自由作文から目的に応じた文章の作成と相互批評へという「書くこと」の活動重視、このような方向付けが前学習指導要領の改訂に明らかであった。そのため教科書教材としても小説教材を削減し、話し合いに関わる説明的文章が増加する傾向を見せるのは当然であろう。しかしながら、中野登志美によれば、前学習指導要領の内容の項目に「小説」と明記されたことで、森鷗外の「木霊」、芥川龍之介の「トロッコ」などの定番教材が復活しているケースもあり、「伝え合う力」の根底に文学的教育の重要性を指摘する流れも存在することを伺わせている。例えば中野の指摘するように、文化審議会国語分科会の2004（平成16）年2月の答申に次のようにあることは注目される[5)]。

> 学校における国語科教育では、「情緒力」「論理的思考力」「思考そのものを支えてい

く語彙力」の育成を重視していくことが必要である。
情緒力を身に付けるためには、小学校段階から「読む」ことを重視し、国語科の授業の中で、文学作品を中心とした「読む」ことの授業を意図的・継続的に組み立てていくことが大切である[6)]。

現実社会の変化に対応した「生きる力」と、伝統的な言語文化を重視した「国語を尊重する態度」の育成という、一見方向性を異にする前学習指導要領の改訂における方針は、その根底で言語を身に付けることについての基本的な重要性についての認識を共有しており、「論理的思考力」の前提として必要な「情緒力」という用語によって、文学的教材の位置づけがなされていたことが分る。

今時改訂による学習指導要領においても同様な位置づけは継続しているものと思われる。ここで教材研究の対象として扱う「バースデイ・ガール」について、教科書編纂者の編集意図を明らかにしつつ、今時改訂への流れを検討してみることとする。

教育出版「『伝え合う言葉　中学国語3』編集趣意書」[7)] によれば、小説「バースデイ・ガール」は、「七　対話をひらく」の章に収められ、中学３年生の３学期という最終学年のまとめとして用いられる教材である。「七　対話をひらく」の章では「課題を解決するために話し合う」というリード的文章に続いて、「「対話力」とは何か」（多田孝志）という説明的文章、「自分の作品集をつくる」という「書くこと」の指導とあわせ、「読むこと」の教材（2時間配当）として扱われる。「中学校学習指導要領　第３学年」との関わりを示す「対照表」によれば、「バースデイ・ガール」は以下のような項目を展開するための教材として位置づけられていることがわかる。以下に指摘があった項目を抜粋して示してみる。

2内容　C 読むこと
(1) 読むことの能力を育成するため、次の事項について指導する。
ウ　文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。
オ　目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること。
(2) (1) に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。
ウ　自分の読書生活を振り返り、本の選び方や読み方について考えること。

言うまでもないことだが、すべての項目について単一の教材で指導することは困難だという配慮から特定の項目を指定していると推測されるが、(1) の項目について言えば「ア　文脈の中における語句の効果的な使い方など表現上の工夫に注意して読むこと」、「イ　文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること」、「エ　文章を読んで人間、社会、自然について考え、自分の意見を持つこと」などの項目も「内容」の理解と「読むこと」の指導においては関わってくる。特に「場面や登場人物の設定の仕方」については小説に関わってくる項目であるが、本教材はまとめ段階の指導であるゆえに、「ウ」の項目「構成や展開、表現の仕方」に繋がる前提とされているのである。また (2) の指導事項に関して「ア　物語や小説などを読んで批評すること」ではなく「オ」の項目の読書指導が選ばれているのも、高等学校国語科へと展開する基礎的な国語力を身に付けさせるという同様の配慮によるものと推測される。

さて、当該教科書は旧学習指導要領に則った内容であるため、今時の改訂を盛り込んでいないわけだが、以下に新学習指導要領の項目を挙げ、対照させてみる。

2内容［思考力、判断力、表現力等］
C 読むこと
(1) 読むことに関する次の事項を身につけることができるよう指導する。
ア　文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えること。

イ　文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること。

ウ　文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること。

エ　文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつこと。

(2)（1）に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア　論説や報道などの文章を比較するなどして読み、理解したことや考えたことについて討論したり文章にまとめたりする活動。

イ　詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。

ウ　実用的な文章を読み，実生活への生かし方を考える活動。

「読むこと」の指導については、旧学習指導要領における「読むこと」の項目「イ」の「文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること」、及び「ウ」の「文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること」がそれぞれ項目「ア」と「ウ」とに対応している。「バースデイ・ガール」について旧指導要領の「ウ」の項目が挙げられていたが、「文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」とより明確化されたことになる。同時に「文章を読み比べる」という前提条件に対して、項目「ア」の「文章の種類を踏まえて」という文言が相当するとするならば、旧指導要領に比較して「物語の展開の仕方」という表現によって、その対象が小説を中心とした文学的文章であることが分るようになっていると指摘できる。また（2）の「言語活動」の項目については、「イ」項目の「詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」が「オ」に代わって小説教材との向き合い方を指示すると考えられる。旧指導要領における、文章を読むことで「知識を広げたり、自分の考えを深めたりする」という定義だけではなく、詩歌や小説を読むことから「批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」が「言語活動」して提示されていることも注目に値する。

また旧学習指導要領における（2）の「ウ」の項目で「自分の読書生活を振り返り、本の選び方や読み方について考えること」とあり、読書の拡がりへと導くことで「情緒力」と「論理的思考力」の土台を形成することへと繋げる意図があると考えられる。今時学習指導要領における改訂では、「読書」に関して別項「2 内容［知識および技能］」において次のように触れられている。

2 内容［知識および技能］

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

オ　自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について理解すること。

このように教材での学習に先立ち、読書への導きが［知識および技能］として予め知らしめるべき内容として挙げられている。今時の改訂において新たに立てられた項目でもあり、読書習慣を身に付けさせる指導が重要な課題であることが分る。またこの項目は学年を追って「読書が、知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりすることに役立つことを理解すること」（一年）、「本や文章などには、様々な立場や考え方が書かれていることを知り、自分の考えを広げたり深めたりする読書に生かすこと」（二年）と深化され、「自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について理解すること」という三年での獲得目標とされている。

以上のように、小説教材として「バースデイ・ガール」が載録された『伝え合う言葉　中学国語 3』は旧学習指導要領の枠内で作られたものであるが、その編集意図からは小説教材の「構成や展開、表現の仕方について評価すること」で主体的に表現と向き合い、結果として読書体験が「知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること」に気付かせ、さらに「自分の読書生活を振り返り、本の選び方や読み方につい

て考えること」によって読書習慣を身に付けさせる、このような今時の学習指導要領における指導観に通じるものとして捉え得ることが確認できた。

また、新学習指導要領では小説教材によって「論理や物語の展開の仕方などを捉えること」から「構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」へと学びを深め、「詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」によって主体的で深い学びへと至る道筋が想定されていると考えられる。その意味で、中学校学習指導要領国語科の改訂によってもたらされた変化は、小説や韻文などの文学的教材の排除であるよりむしろ、より積極的な捉え直しであることが分析の結論として導かれる。

中学校国語科の目標の（3）として掲げられた「言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」という項目は、社会的有用性のみで判断される実用言語のみならず、「言語感覚を豊かにし」、「国語を尊重してその能力の向上を図る」契機として、豊かな言語文化に触れることの重要性が含意されているのである。その意味で「我が国の言語文化」を古典教材のみに限定して理解することや、説明的文章を用いての言語活動のみを偏重するような教育活動は批判されるべきであり、言語文化として文学的教材の力をさらに活用して、主体的で深い学びをもたらすような授業実践が期待されるのである。

４　小説教材としての「バースデイ・ガール」

さて上記のような小説教材の位置づけを確認した上で、新学習指導要領における小説教材の有効性について、村上春樹の短篇小説「バースデイ・ガール」を分析対象として検討する。小説「バースデイ・ガール」は、村上春樹の翻訳作品集『バースデイ・ストーリーズ』（2002年11月27日、中央公論社）に収められた書き下ろし短篇小説である。教育出版『伝え合う言葉　中学校国語3』に2006年から載録され2016年に及んでいる。中学校向け教材として数少ない例であるが、新たな定番教材となる可能性を持つと考えられる。単行本と教科書載録本文とでは異同があるが、本論では教材として「バースデイ・ガール」を論じる必要上教科書本文を対象とする[8)]。

「バースデイ・ガール」は、二十歳の誕生日を迎えた「彼女」が、アルバイト先のオーナーから、誕生日のプレゼントとして一つだけ願いごとをかなえてあげると言われ、半信半疑ながらある願いごとをするというストーリーである。また、それから十数年がたった現在、「彼女」はその体験を聴き手であり、物語の語り手である「ぼく」にむけて語っているという入れ籠型の構造を持っている。

全体の構成は一行空きを用いて八つの部分に分れており、第一段落、第三段落、第四段落、第六段落が「彼女」の過去が三人称で語られた部分。第二段落、第五段落、第七段落が現在の「彼女」と「ぼく」との対話である。最後の第八段落ではオーナーの言葉が繰り返され、「彼女」が問いかけられたように、語り手の「ぼく」を通して、読者にもまた人生の選択を突きつけるという構造となっている。

先行研究では、「彼女」が何を願ったのか、またそのことを「彼女」が後悔しているのかという点で議論がなされてきた。作中では彼女の願いは最後まで明らかにされない。願いごとを聞いたオーナーは「年ごろの女の子にしては、いっぷう変わった願い」だと受けとめ「もっと美人になりたいとか、賢くなりたいとか、お金持ちになりたいとか、そういうことじゃなくてもかまわないんだね？」と念を押している。また、現在の「ぼく」は「彼女」に対して、その願いは実現したのか、その願いを選んだことに後悔はしていないか、の二点を尋ねる。「彼女」は「最初の質問に対する答えはイエスであり、ノオね。まだ人生は先が長そうだし、私はものごとのなりゆきを最後まで見届けたわけじゃないから」と答えている。五十嵐淳はその願いは「人生や生き方に関わる願いごとだが、平凡ともいえる願いごとである。その願いごとは人生の最後にならないと、叶ったかどうか分からないものである」と分析した上で「平凡でもいいから幸せな人生を送りたい」というような願いだと推測している[9)]。

また二つ目の問いに対して「彼女」の次のような様子を「ぼく」は看取している。

> 彼女は奥行きのない目をぼくに向けている。ひからびたほほえみの影がその口もとに浮かんでいる。それはぼくにひっそりとした諦めのようなものを感じさせる。

三歳年上の公認会計士の夫と二人の子どもの家族を持ち、ドイツ車に乗って週二回友達とテニスに興じる、そんな経済的にも家庭的にも安定した生活だと思われるが、「現在の生活に充実感や満足感を抱いていない。むしろあきらめや後悔を抱いて生きているようである」[10]と五十嵐は読んでいる。「人間というのは、何を望んだところで、どこまでいったところで、自分以外にはなれないものなのね」という「彼女」の感慨が、二十歳の誕生日における人生の選択の結果、別の人生の可能性を失ってしまったことへの後悔として解釈されているのである。

第七段落の末尾で「彼女」は「ぼく」に反問する、もしあなたが同じ立場ならどんな願いごとをしたかと。それに対して「ぼく」は何一つ思い浮かべることが出来ない。この対比を五十嵐は次のように解釈している。

> 「彼女」は人生の一回性を自覚させられて生きてきた存在であり、「ぼく」は一回性に無自覚に生きてきた存在である。一つを選ぶということは、他を捨てるということである。「言ったらオシマイ」なのである。二十歳の誕生日という人生の始まりから、「彼女」は自分の選択の是非を問いつつ生きざるを得なかった[11]。

以上のように、五十嵐の教材観は「バースデイ・ガール」についての基本的な解釈の枠組みを作ったと言えよう。「彼女」は二十歳の時の願いごとによって別の人生への可能性を閉ざされ、そのことの意味を問い続けながら十数年を過している。人間は結局自分以外にはなれないということへの諦念を抱きながら、変化のない日常に耐え続けている。そのような現在であるのだが、「ぼく」のように人生の一回性に対して無自覚な存在よりも誠実な生き方を選んでいるのであって、読者もまた人生の選択に対して誠実に向き合うべきだ、このような主題から授業を組み立てることを求めている。

五十嵐の解釈に対して、佐野正俊は語り手の「ぼく」による積極的な批評意識を対置している。佐野によれば「ぼく」は小説家として「彼女」の人生を描くことでその選択への疑義を示している。

> 〈僕〉は「彼女」の人生を語ることで、自らの人生をも含めた人生全般の宿命を問題にしているのである。それは、人生を一回性のレベルから問題にするだけではなく、人生を絶対的な個別性のレベルから問題にする批評意識である（傍点原文）[12]。

佐野の主張は「彼女」をメタレ ベルからかたる「ぼく」の立ち位置を、作者村上春樹の立ち位置に重ね、「「彼女」の話の聞き手である「僕」は「願いごと」を「何も思いつかない」が、語り手の〈僕〉には思いあたるふしがあるのである」とする。佐野の解釈は、登場人物としての「ぼく」と語り手の「ぼく」を峻別し、小説家としての「ぼく」が「彼女」の人生を批評するという可能性へ作品を開くことに成功している。

しかしながら、教材研究の観点からは佐野論文は小説の語り手（「ぼく」）に作者（村上春樹）を接続する点で、作家研究を補完するものであっても、主人公の心情を把握するという面では五十嵐の解釈を越え出るものではない。

可児洋介は、「彼女」の願いが何であったかという問いに新たな説を立てる。可児はオーナーの言い回しにおける反復に注目し、「君がそう望むなら」という奇妙な言い回しによって、「彼女」が「「何かを望んでいる自分」という自己像を与えられている（傍点原文）」とする。さらにオーナーによる誕生日の祝いの言葉を「彼女」は頭の中で反復している。

> 「誕生日おめでとう。」と老人は言った。「お嬢さん、君の人生が実りのある豊かなものであるように。何ものもそこに暗い影を落とすことのないように。」

二人はグラスを合わせた。

何ものもそこに暗い影を落とすことのないように、と彼女は頭の中で老人のせりふを反復した。どうしてこの人は、こういうちょっと普通じゃないしゃべり方をするんだろう？

この後に、オーナーは彼女の願いごとをかなえようと申し出ることとなる。つまり「「彼女」は老人に自らの欲望を先取りして与えられているかのような錯覚に半ば陥りながら、先刻の「老人」の台詞を口に出して反復したに相違ないのである（傍点原文)」[13] と可児は考えるのである。

オーナーの反復する言い回しによって「彼女」は誘導され、「彼女」の願いごとは「彼女」の人生を宿命として規定したのだと可児は考察する。他方「ぼく」の役割は、そのような「彼女」に向き合うことをせず、共有を拒むことで彼女を捉えた物語を相対化することだとする。

深津謙一郎もまた、可児論を深める方向で論じている。偶然の出来事を必然と信じさせるオーナーの用いたレトリックが、「彼女」を二十歳の誕生日に願った物語へと封じ込めているとする。深津は言う「「バースデイ・ガール」から浮かび上がるのは、今こうあることを意味づけようとして呼び出された物語が、かえって彼女の今を損なってしまうという逆説である。その結果、彼女は深い孤独のなかに閉じ込められる」[14] と。「ぼく」もまた「彼女」を救済することは出来ないと深津は指摘している。

可児と深津の解釈は、「彼女」の願いごとが「彼女」自身を呪縛していると読む点で、人は自分自身以外のものになれないという「彼女」の言説を負の方向に推し進めたものである。作家研究の方向での解釈の当否は置くとして、教材観の観点から考察するならば、学習者生徒にあなたなら何を望むかと問うことは意味をなさないこととなる。例えば可児は「生徒に何を願うかと問いかけるのではなく、むしろ何も願わないという選択肢が存在することを教えるべきである」[15] としている。

しかしながら、人生の意味を深く問うことの出来る可能性を持つこの教材を前にして、人生に何も願わないよう教えるという教材観は、ある種の逆説だとしても批判されるべきであろう。

ただし可児論には「ぼく」の役割について「彼女」の物語を相対化する方向で存在しているという指摘があった。同様に西田谷洋は「エコー発話」の概念を導入することで、「彼女」と「ぼく」との対話に意味を見出している。西田谷は次のように述べる。

彼女はなぜ「僕」に二十歳の誕生日の話を聞かせたのだろうか。

彼女の今の生活は、老人にした願いが彼女の人生を規定している。しかし、彼女はその生活に満足せず、逸脱する／追加承認されること、すなわち可能性を望んでいる[16]。

この作品において、なぜ「彼女」と「ぼく」との対話が描かれているのかを問う、重要な指摘である。「彼女」は二十歳の誕生日にオーナーと対話するなかで願いごとを託した。同様に、二十歳の誕生日から遠く離れた現在、新たな「逸脱」を求めていると西田谷は解釈する。対話において相手の発言を繰り返すこと、即ち「エコー発話」は、本作品ではユーモアとして機能することで、「彼女」の認識に風穴をあける可能性を持つのである。

例えば現在の生活への不満・不安とも受け取れるドイツ車のバンパーにへこみがあるという発言に対して、「ぼく」は「バンパーはへこむためについているんだよ」と応える。「「そういうステッカーがあるといいわね」と「彼女」は言う。そして「『バンパーはへこむためにある』」と応える。ここで「彼女」は、ステッカーという用語に「標語・モットー」という意味と物理的なシールの意味との二重性をつくり出すことで笑いを浮べる。「ぼく」もまた「彼女」の発言への「エコー発話」として「『人間というのは、どこまでいっても自分以外にはなれないものだ』」というステッカーを想定したユーモアで応えている。大木志門もまたステッカーに注目し、次のように述べている。

バンパーのへこみは先述のように生活

への不満とも不満のなさ（への不満）とも言えるが、「ぼく」がそれを「ステッカー」と呼称することで、それはどこにでもある、そして貼り替え可能なものへと変容する。そもそも「バンパーのへこみ」を最初に「ステッカー」と言ったのは「彼女」であったが、「ぼく」は「バンパーはへこむためにある」とそれを「反復」することで、「悪しき物語」を組み替えるのである[17]。

両者の指摘するのは、「ぼく」との対話によって「彼女」が変化する可能性についてである。五十嵐が「彼女」について、二十歳の誕生日に願いごとをすることで人生の一回性に気づかされた存在という解釈を与えて以来、論者の多くは「彼女」の人生を既に決定されたものとして読み取り、そこから別の選択肢によって人生を変化させることへの怖れと憧れを読み取ってきた。しかしながら、「彼女」の願いごとは、たとえオーナーによって「すでにかなえられた」と宣言されたとしても、「彼女」にとってその実現は自分自身の人生を見届けてからでなければ確認できない、そのように未確定な未来に向けてなされた願いごととして描かれていた。次の場面を読みかえしてみよう。願いが実現したのかどうかを尋ねる「ぼく」に対する「彼女」の応答である。

「最初の質問に対する答えはイエスであり、ノオね。まだ人生は先が長そうだし、私はものごとのなりゆきを最後まで見届けたわけじゃないから。」

「時間のかかる願いごとなんだ？」

「そうね。」と彼女は言う。「そこでは時間が重要な役割を果たすことになる。」

「時間が重要な役割を果たすことになる」と宣言されている以上、対話の現在において彼女の願いの実現は未だ見届けられていないことになる。おそらく生涯にわたってその願いごとの実現は先送りにされるようなものなのかもしれない。少なくとも「平凡でもいいから幸せな人生を送りたい」というような願いごととは質的に異なる何かの到来を「彼女」は待ち望んでいるのである。

最後に、彼女の願いは何なのかという問いに対して、ひとつの解釈を与えておきたい。第一にそれは「美しさ」、「賢さ」、「富」という世俗的な価値とは異なった願いである。したがって、「公認会計士の夫と二人の子ども」や「アイリッシュ・セッター」や「ドイツ車」とは無関係である。その意味で、彼女が現在の人生の諸条件に対して「諦め」を感じているか否かは、本来問題にならないわけである。

第二にオーナーの祝詞である「人生が実りのある豊かなものであるように。何ものもそこに暗い影を落とすことのないように」という祈りを彼女も反復したという解釈について。オーナーの提示した願いごとの定義が具体的に「こうなればいい」というもので、かつ「一つだけ」の願いであり、「あとになって思い直して引っこめることはできない」という条件すら付加されていることから考えると、「実りある豊かな」人生という願いは抽象度が高すぎる。加えて、「何ものもそこに暗い影をおとすことのないように」という付加された文言自体が二つ目の願いと数えられることからも否定できる。

第三にオーナーの言う「願いはすでにかなえられた」という言葉と、願いをひとつも思いつかない「ぼく」に対して「彼女」が言う「あなたはきっともう願ってしまったのよ」という言葉の差異を考慮する必要がある。「願ってしまった」を分節するならば、「願って」その結果としてその願いが実現して「しまった」ということである。すでに成就した願いは反復されない。逆に言えば、「彼女」の願いはつねに反復され、そして更新されるようなものであるはずだ。

以上の条件を与えられた上で、「彼女」の願いを推測するならば、本文中でオーナーが「いっぷう変わった願い」と評するように、「彼女」の願いとは非実用的でかつ時間がかかる願いである。「美しさ」、「賢さ」、「富」を手に入れたとき、自分の人生がどう変化するか分らず一歩引いてしまった「彼女」の願いとは、端的に言って「自分の人生の意味を知りたい」ということである。二十歳の時点で「人生というものがまだうまくつかめていない」、「その仕組みがよくわからない」と訴える「彼女」にとって、この

質問の答こそ生涯を掛けても知りたかったことなのだ。少なくとも二十歳の「彼女」はそう考えていたのである。

５「読むこと」から「話し合う」活動へ

もう一つの「ぼく」の質問にある、二十歳の誕生日に願ったことを、「彼女」が後悔しているか否かについてはすでに自明である。「彼女」は自分が自分以外になるような願いを持った訳ではない。また、現在の生活についての不安や不満からかつて願ったことを後悔する理由もない。なぜなら「彼女」の願いは「彼女」自身の人生が終ったところではじめて実現するような願いであるからである。すなわち「そこでは時間が重要な役割を果たすことになる」わけだ。

「バースデイ･ガール」という教材は、五十嵐の言うように「読み手に「彼女」の「願いごと」は何かということと、読み手自身に自らの人生の意味を問いつづけさせていく」[18] ような小説である。教材研究としての考察から示したように、「彼女」の願いを特定することに意味があるわけではない。「自分の人生の意味を知りたい」という文言は、「自分にとっての幸福の意味を知りたい」と読みかえても問題はないし、「自分にとって幸せな人生を送りたい」という願いもまた結局は同義なのである。

作品研究史において「彼女」の「ひからびたほほえみの影」が現在の人生への諦めとかつて願ったことへの後悔として読まれてきたことは、「公認会計士の夫」や「二人の子ども」や「ドイツ車」といったアイテムが人生の重要な要素であるとする論者自身の人生観が問われることでもある。もちろん職業や家族や財産と言ったものが無意味だと言うわけではない。しかしそれが自分自身にとってどのような意味を持つのか、そこにこそ「彼女」の問いかけの意味はあったと考えられる。

作品の前半部において、「彼女」の勤めるイタリア料理店におけるルーティンワークが強調されている。それは開店以来レジに坐っている黒服の中年女性や、決まった時間にオーナーに食事を運び続けるフロア・マネージャーや、そして何よりもオーナー自身によって体現されているだろう。歴代のシェフが「虚無の穴に小石を放り込むようなもの」と感じるような日日の繰り返し、チキンであることだけが条件であるような彼の夕食がそれを証している。

だが、人生におけるルーティーンに意義がないと言えるだろうか。おそらく彼女と一生に一度だけ顔を合わせたオーナーは、こう語っていた。「今日はたまたま君の二十歳の誕生日であり、おまけに君は私のために温かいすてきな食事を運んできてくれた」と。六本木の名の通ったイタリア料理店、まっとうで食べ飽きない料理、オーナー自身が変らずその料理を食べ続けていることは、どのようなチキンであっても、決して食べ飽きない魅力を持っていることを示している。偶然にいつもの男性マネージャーではなく、若い女性がそれを運んで来たとして、そのことが料理を変化させたわけではないのである。一見ルーティーンに見える人生の繰り返しの中に、二十歳の彼女にはまだ味わえなかった人生の意味が隠されていたのではなかったか。

「彼女」も、また「彼女」の話を語り直す「ぼく」も、料理をつまらないものの比喩として用いていることも一種の仕掛けである。「コックにどなられながら、かぼちゃのニョッキやら海の幸のフリットをテーブルまで運ぶのは、二十歳の誕生日のまともな過ごし方とはいえない」というのは、その時の「彼女」の感情に成り代わって語り手として「ぼく」が語った感想である。それは「なにごともないまま、おめでとうと言ってくれる人もないまま、アンチョビ・ソースのかかったトルテリーニを運びながら、むなしく一日が終わろうとしていた」という「彼女」自身の言葉と符合している。

大切なのはこれらの料理が繰り返しこの店では味わい続けられてきたという歴史であって、「そこでは時間が重要な役割を果たす」のである。だとするならば、「彼女」の願いを想像した「ぼく」が、オーブンのなかの巨大なパイをイメージすることも、あながち間違いではない。プディングと同様にパイもまた、実際に食べてみてはじめてその美味しさを理解することが出来るものだからである。

以上のように、教材研究を経て確認できたことは、「彼女」の願いは何か特定すること自体

に意味があるわけではないということである。しかし、学習者生徒が小説の作品世界に分け入り、その中で充分に「彼女」に寄り添いながら、人生の意味について考えようとする、そのことにこそ小説を教材として読むことの意義があると考える。そこでは「読むこと」の活動が実践されることとなるわけだが、指導者から小説の構造を詳細に解き明かすような授業展開は必要ない。学習者生徒が自ら主体的に作品の世界を解き明かそうと考えること、その出発点となるような問いかけを与えることが重要だ。

「読むこと」を通じて自らの人生を見つめる体験は、やがて「話すこと」、「書くこと」、「聞くこと」の活動へと展開するよう授業を組み立てるべきであろう。新学習指導要領国語科「読むこと」の項目（2）には「イ　詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」によって（1）の「論理や物語の展開の仕方などを捉えること」などの「読むこと」の能力を養うよう指示されている。また教材についての留意事項として「イ　伝え合う力、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにするのに役立つこと」や、「オ　人生について考えを深め、豊かな人間性を養い、たくましく生きる意志を育てるのに役立つこと」などの条件が示されている。「バースデイ・ガール」を読むことで、学習者生徒一人ひとりが人生における選択の意義を考える機会が得られるならば、中学校3年段階の国語科教材としての意義はより深いものになると考える。

発展学習として例えば、「彼女」の願いについて想像して「書くこと」や、様々な見解について「話し合う」活動が想定される。また研究史上も定説が出せないほどこの教材の小説としての解釈には幅があるので、特定の解釈にこだわらずに感想を出させたい。ワークシートを準備して論点を整理するよう指導することで、「話すこと」、「聞くこと」の活動への展開は容易になると考えられる。

6　おわりに

以上、本論考においては中学校学習指導要領国語科の改訂が小説教材の扱いにどのような影響を与えるのか、新旧の指導要領を比較しながら検討して来た。その結果新学習指導要領では小説教材によって「構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」へと学びを深め、「詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」によって主体的で深い学びへと至る道筋が想定されていることが分った。

後半では「バースデイ・ガール」の教材研究上の疑問点について論点を整理し分析を試みた。その結果主題として人生の意味について考えようとすることの重要性が見出された。また、「読むこと」の学びのために、「話し合うこと」の言語活動に結びつける必要性が分った。結論として、村上春樹「バースデイ・ガール」は、短篇ながら中学校国語科教材として適切なものであることが分った。

今後2021年4月からの新学習指導要領の完全実施に向けて、教科書の編纂が行なわれ検定を受けることとなるが、村上春樹「バースデイ・ガール」は新学習指導要領国語科に対応して主体的で深い学びを実施するための教材として充分な意義があることが確認できたと言えるだろう。

最後に、民法改正による18歳への成人年齢引き下げが、二十歳の誕生日の出来事を中心化した当教材の評価に影響を与える可能性がある点が懸念される。国語教育の問題からは離れるが、社会通念としての二十歳という年齢の意義が失われることとなれば、「バースデイ・ガール」という作品の享受も変化してしまうだろう。このことは時代に合わせて作中の年齢を引き下げることで解決するような問題ではないのである。

＜引用文献＞

1）原善「教科書の中の村上春樹―あるいは村上春樹の教材価値を論ずるための序説―」『暁星論叢』66号、2016年7月。
2）文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　国語編』2018年3月、東洋館出版社。
3）三省堂「中学校国語科学習指導要領新旧対照表」https://tb.sanseido-publ.co.jp/wp-sanseido/wp-content/themes/sanseido/images/j-school/js-kokugo/cs_js-kokugo_newandold.pdf （2018年9

月 23 日閲覧）
4） 2）に同じ。以下同様。
5） 中野登志美「学習指導要領において文学はどのように扱われてきたか―中学校学習指導要領の中の文学の位置づけに着目して―」『論叢国語教育学』復刊 3 号、2012 年 7 月。
6）「これからの時代に求められる国語力について」（文化審議会答申）2004 年 2 月 3 日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm（2018 年 9 月 24 日閲覧）
7） 教育出版「『伝え合う言葉　中学国語 3』編集趣意書」https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/docs/h28chugaku/kokugo/index.html（2018 年 9 月 20 日閲覧）
8） 例えば一人称「僕」を「ぼく」とする、固有名詞「アウディ」を「ドイツ車」と置き換えるなどの異同がある。作中の「彼女」の生活レベルを示す高級自家用車のブランド名ではあるが、「ドイツ車」の語感もまた「外車」や「輸入車」とは異なるニュアンスを伝えることができるので、指導上問題は無い。作品として固有名を持つ方が魅力的であることはここでは置く。
9） 五十嵐淳「村上春樹の教科書作品をどう読むか―小説「バースディ・ガール」の教材分析」『研究紀要』（科学的「読み」の授業研究会）10 号、2008 年 8 月。
10） 9）に同じ。
11） 9）に同じ。
12） 佐野正俊「村上春樹「バースデイ・ガール」の教材研究のために―〈語り〉が生成する「僕」の物語を読む―」『日本文学』58 巻 8 号、2010 年 8 月。
13） 可児洋介「村上春樹「バースデイ・ガール」における語りの機能―邪悪な「物語」を拒む倫理的責任について―」『学習院大学人文科学論集』21 号、2012 年 10 月。
14） 深津謙一郎「「バースデイ・ガール」―「個」を損なう物語の在りか」千田洋幸、宇佐見毅編『村上春樹と二十一世紀』（2016 年 9 月 15 日、おうふう）所収。
15） 13）に同じ。
16） 西田谷洋「エコーとユーモア―村上春樹「バースデイ・ガール」」『日本文学』66 巻 1 号、2017 年 1 月、後『村上春樹のフィクション』（2017 年 12 月 5 日、ひつじ書房）所収。
17） 大木志門「教材研究としての村上春樹「バースデイ・ガール」再論―「プールサイド」と「三十五歳問題」を手がかりに」『山梨大学教育学部紀要』25 巻、2017 年 3 月。
18） 9）に同じ。